

訓 詁

孫子兵法

1. [計篇](#)
2. [作戰篇](#)
3. [謀攻篇](#)
4. [形篇](#)
5. [勢篇](#)
6. [虛實篇](#)
7. [軍爭篇](#)
8. [九變編](#)
9. [行軍篇](#)
10. [地形篇](#)
11. [九地篇](#)
12. [用間篇](#)
13. [火攻篇](#)

計篇

孫子は曰^いう。兵は国の大事であり、死生の地、存亡の道は、察しなくてはならないのである。だから、これを^{はか}経るには五事により、これを^{くら}校べるには計によって、その情を^{さぐ}索る。一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く将、五に曰く法。道は民に上と意を同じくさせるものであり、ためにこれと死生を^{とも}与にすべくして、危ぶまない。天は陰陽・寒暑・時制である。地は遠近・險易・広狭・死生である。将は智・信・仁・勇・嚴である。法は曲制・官道・主用である。凡てこの五つは、将であって聞かないということは^な莫い。これを知る者は勝ち、知らない者は勝たない。そこで、これを校べるには計によって、その情を索る。曰く、主はどちらが有道か、将はどちらが有能か、天地はどちらが得ているか、法令はどちらが行われているか、兵衆はどちらが強い^なか、士卒はどちらが^{たす}練れているか、賞罰はどちらが^{わたし}明らかか。吾はこれにより勝負を知るのである。

将が吾の計を聴き入れるなら、これを用いれば必ず勝つ。これを留める。将が吾の計を聴き入れなければ、これを用いれば必ず敗れる。これを去る。計が利として聴き入れられれば、のちにはこれが^{たす}勢を為して、その外を^{たす}佐ける。勢は利に因って権を制することである。

兵は詭道である。だから、能にしてそれに不能を示し、用にしてそれに不用を示し、近にしてそれに遠を示す。利なればそれを誘い、乱なればそれを取り、実なればそれに備え、強なればそれを避け、怒なればそれを^{みだ}撓し、卑なればそれを^{つか}驕らせ、佚なればそれを^{つか}勞れさせ、親なればそれを離す。その無備を攻め、その不意に出る。これは兵家の勢であり、先に伝えることはできないのである。

それで、まだ戦わないとき廟算して勝つ者は、算を得ることが多かったからだ。まだ戦わないとき廟算して勝たない者は、算を得ることが少なかったからだ。算が多ければ勝ち、算が少なければ勝たない。それを算が無いときに於いては、いうまでもないことだ。吾はこれによってそれを観て、勝負を見いだすのである。

作戦篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、馳車は千駟・革車は千乗、帯甲は十万で、千里に饋糧すれば、内外の費・賓客の用・膠漆の材・車甲の奉は、日に千金を費やし、その後には十万の師は挙がるのである。その戦いを^{おこ}用なうや久しくすれば兵は鈍り鋭は挫け、城を攻めれば力は屈し、久しく師を^{さら}暴せば国用が不足する。それで兵が鈍り鋭が挫け、力が屈し貨が^つ殫きれば、諸侯はその弊に乗じて起ち、智者が有ったとしても、その後を善くすることはできないのである。それで兵は拙速なることを聞いても、巧^み久なることは^と睹ないのだ。兵を久しくして国を利する者は、有ったことがないのだ。だから尽く用兵の害を知らない者は、尽く用兵の利も知ることはできないのだ。

善く兵を用いる者は、役は再びは^と籍らず、糧は三たびは載せず、用は国に取り、糧は敵に因り、それで軍の食は足りさせるべきなのだ。国が師にて貧しくなるのは、遠い者に遠く^{はこ}輸ぶによる。遠い者に遠く輸べば百姓は貧しくなる。近くの師にては貴売し、貴売すれば百姓の財は^つ竭き、財が竭きれば兵役に急し、力は中原に^つ殫き、用は家に虚しくなり、百姓の費は、十にその七を去る。公家の費は、破車罷馬・甲冑弓矢・戟盾矛櫓・丘牛大車で、十にその六を去る。だから智将は務めて食は敵による。敵の一鍾を食べるのは、吾が二十鍾に当たり、萁稗一石は、吾が二十石に当たる。

そこで、敵を殺すのは怒で、敵の貨を取るのは利である。だから車戦して車を十乗已上も得れば、その先ず得た者を賞し、そしてその旌旗を更え、車は雑えて乗り、卒は善くして養う。これこそ敵に勝って強さを益すと謂うもの。

だから、兵は勝つことを貴び、久しくすることを貴ばない。ために、兵を知る将は、民の命の司、国家の安危の主なのだ。

謀攻篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、国を全^{たも}つを上とし、国を破るはこれに次ぐ。軍を全つを上とし、軍を破るはこれに次ぐ。旅を全つを上とし、旅を破るはこれに次ぐ。卒を全つを上とし、卒を破るはこれに次ぐ。伍を全つを上とし、伍を破るはこれに次ぐ。だからこそ百戦百勝は、善の善ではないのだ。戦わずして人の兵を屈することが、善の善なのである。

だから上兵は謀を伐ち、その次は交を伐ち、その次は兵を伐ち、その下は城を攻める。攻城の法は、已^やむを得ないからするのだ。櫓・輜輳を修め、器械を具^{そな}えることは、三月して後に成る。距闐はまた三月して後に已^{おわ}る。将がその忿^{いか}りに勝^たえずして、これに蟻附し、士卒の三分の一を殺^しなせ、しかも城を抜けないというのは、これは攻城の災いだ。それで善く兵を用いる者は、人の兵を屈するにも戦うのではないのだ。人の城を抜くにも攻めるのではないのだ。人の国を毀^{やぶ}るにも久しくするのではないのだ。必ず全つことによって天下に争う。ために兵を頓^{つか}れさせずに利を全てる。これが謀攻の法である。

それで将は国の輔であり、輔が周であれば国は必ず強く、輔に隙があれば国は必ず弱い。そこで君が軍に患う所以は三つある。軍が進むべきでないの知らないで、これに進めと謂う。軍が退くべきでないの知らないで、これに退けと謂う。これを軍を糜^{しば}ると謂う。三軍の事を知らないで、三軍の政を同じくすれば、軍士は惑い、三軍の権を知らないで、三軍の任を同じくすれば、軍士は疑い、三軍が既に惑い且つ疑えば、諸侯の難が至るのである。これを軍を乱し勝を引くと謂う。

ここに勝を知るには五つのことが有る。戦うべきと戦うべきでないとを知る者は勝つ。衆寡の用^{さと}を識る者は勝つ。上下の欲を同じにする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。将が能であり君が御さない者は勝つ。この五つは勝つことを知るの道だ。だから曰く、彼を知り己を知れば百戦^{あや}して殆うからず、彼を知らずしても己を知れば一勝一負、彼を知らず己も知らざれば戦う毎に必ず殆うし。

形篇

孫子は曰う。昔の善く戦う者は、先ず勝たせなくしてから、敵が勝たせてくれるのを待つ。勝たせなくすることは己によるが、勝たせてくれるかは敵による。だから善く戦う者も、勝たせなくすることはできるが、敵をして勝たせてくれるなりにはさせられない。それで、勝つことは知るべし、しかし為すべからず、と曰う。勝たせなくするのは守りであり、勝たせてくれるのは攻めである。守れば余りが有り、攻めれば不足する。善く守る者は、九地の下に蔵れ、九天の上に動くから、能く自らを保って勝ちを全うするのだ。

勝ちを^{あらわ}見して衆人の知る所に過ぎないのは、善ではないのだ。戦い勝って天下が善しと曰うのは、善ではないのだ。それは秋毫を挙げるのは多力とはせず、日月を見るのは明目とはせず、雷霆を聞くのは聡耳とはしない。古のいわゆる善く戦う者は、勝ち易い者に勝つのであるから、善くする者が戦えば、奇勝は無く、智名は無く、勇功は無い。だからその戦いは勝って^{たが}忒わない。忒わないのは、その勝ちを^{くだ}措す所、己に敗れた者に勝つのである。それで善く戦う者は、不敗の地に立って、敵が敗れるときを失わないのだ。このため勝つ兵は先ず勝って後に戦いを求め、敗ける兵は先ず戦って後に勝ちを求める。

善くする者は、道を修めて法を保ち、それで能く勝敗の政を為す。

兵法は、一に曰く度、二に曰く量、三に曰く数、四に曰く称、五に曰く勝。地は度を生じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝を生じる。それで勝つ兵は鎰で銖を^{はか}称るが若く、敗ける兵は銖で鎰を^{ごと}称るが若し。

勝者が民を戦わせるとき、積水を千仞の谿に決するが若くさせる者は、形である。

勢篇

孫子は曰う。凡そ衆を治めること寡を治めるが如くさせるのは、分数がこれだ。衆を闘わせること寡を闘わせるが如くさせるのは、形名がこれだ。三軍の衆が、必ず敵を受けて敗けは無くさせるのは、奇生がこれだ。兵が加わる所、礮を卵に投じるが如くさせるのは、虚実がこれである。

凡そ戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ。それで善く奇を出す者は、窮まり無きこと天地の如く、竭きざること河海の如し。終わって復た始まるのは、四時がこれだ。死して更に生まれるのは、日月がこれだ。声は五つに過ぎないが、五声の変は、聴ききることはできない。色は五つに過ぎないが、五色の変は、観きすることはできない。味は五つに過ぎないが、五味の変は、嘗めきることはできない。戦いの勢は、奇正に過ぎないが、奇正の変は、窮めきることはできないのである。奇正が還^{めぐ}って生じあうことは、環に端が無いことの如し。だれがこれを窮められようか。

激水が疾くして石をも漂わせるものは、勢である。鷲鳥が撃つて毀折に至らせるものは、節である。このために善く戦う者は、その勢は険、その節は短にして、勢は弩を張るが如く、節は機を発するが如し。

乱は治から生じ、怯は勇から生じ、弱は彊から生じる。治乱は数であり、勇怯は勢であり、彊弱は形である。

それで善く敵を動かす者は、これを形^{あらわ}せば敵は必ずこれに従い、これを予^{あた}えれば敵は必ずこれを取り、利にてこれを動かし、詐にてこれを待つ。

なれば善く戦う者は、これを勢に求めて人に責^{もと}めない。それで能く人を扱って勢に任せる。勢に任せる者が、その人を戦わせるときは、木石を転がすが如し。木石の性は、安ければ静まり、危うければ動き、方なれば止まり、円なれば行く。だから善く人を戦わせるの勢いを、円石を千仞の山に転がすが如くさせるのは、勢である。

虚実篇

孫子は曰う。凡そ先に戦地に^い処て敵を待つ者は^{やす}佚く、後れて戦地に^{はし}処て戦いに^{つか}趨る者は^{あつ}勞れる。それで善く戦う者は、人を致して人に致されない。能く敵をして自ら至らせるのはこれに利するからで、能く敵をして至るを得なくさせるのは、これを害するからだ。それで敵が佚ければ能くこれを^み勞れさせ、飽ちていれば能くこれを^う饑えさせるには、その必ず^{おもむ}趨く所へ出る。

千里を行って畏れないのは、無人の地に行くのだ。攻めて必ず取るのは、その守らない所を取るのだ。守って必ず固くするには、その攻めない所を守るのだ。だから善く攻める者には、敵はその守る所を^し知れない。善く守る者には、敵はその攻める所を^し知れない。微なるかな微なるかな、形は無に至る。神なるかな神なるかな、声は無に至る。それで能く敵の命を^し司る。

進むとき禦げなくさせるのは、その虚を衝くからで、退くとき追えなくさせるのは、速やかにして及べなくするからだ。そこで^{こちら}我が戦おうとすれば、敵が壘を高く溝を深くするとしても、戦わざるを得なくさせるのは、その必ず^こ救う所を攻めるからだ。我が戦おうとしなければ、地に^い画してこれを^{そむ}守れば、敵が我と戦うを得ないのは、その之く所に^{あつ}乖くからだ。

そこで善く^{ひき}将^あいる者は、人に^あ形^あさせて我は形さず、さすれば我は^あ専^あまって敵は^あ分かれる。我は^あ専^あまって一となり、敵は^あ分かれて十となる。ここで十を以てその一を攻めるのだ。さすれば我は^あ衆^あで敵は^あ寡、能く衆を以て寡を^あ撃てば、^{わたし}吾と^{とも}与に戦う者は^あ約まるのである。吾が与に戦う地は^あ知られず、知られなければ、敵は^あ備える所が多く、敵の備える所が多ければ、吾と戦う者は^あ寡になるのである。そこで前に^あ備えれば後が寡になり、後に^あ備えれば前が寡になり、左に^あ備えれば右が寡になり、右に^あ備えれば左が寡になり、備えない所が無ければ、寡にならない所も無い。寡になるのは人に^あ備えるからで、衆になるのは人をして己に^あ備えさせるからだ。だから戦いの地を^あ知り、戦いの日を^あ知れば、千里にしても会戦せよ。戦いの地を^あ知らず、戦いの日を^あ知らなければ、左は右を^あ救うことができず、右は左を^あ救うことができず、前は後を^あ救うことができず、後は前を^あ救うことができない。それを^あまして遠くとも数十里、近くは数里なれば、吾がこれを^あほかに^あ度るに、越人の兵は多いといっても、また^あどうして勝ちに^あ益しようか。これこそ、勝ち^あは^あ擅に^あできる

のだと曰うもの。敵が衆だとしても、闘えなくしてしまうのだ。

そしてこれを^{はか}策^ふって得失の計を知り、これを迹づけて動静の理を知り、これを^{あらわ}形^させて死生の地を知り、これに^ふ角^れて有余不足の処を知る。

だから兵を形すことの極みは、無形に至る。無形であれば、深間も窺うことができず、智者も謀ることができない。形に^{くだ}因^つて勝^ちを^措すも、衆が知ることにはできない。人が皆な我が勝^ちの形を知っても、吾が勝^ちを^な制^する所以の形を知ることは^な莫^い。そしてその戦勝は^{くりかえ}復^さずして、形に窮まり無く応じる。

それ兵の形は水に象る。水の行くことは、高みを避けて下に^{はし}趨^る。兵が勝^つことは、実を避けて虚を撃つ。水は地に^因って行くを^制し、兵は敵に^因って勝^ちを^制する。だから兵に常の勢は無く、常の形も無い。能く敵に^因り変化して勝^ちを取る者は、これを神と謂う。それで五行に常勝は無く、四時に常位は無く、日には短長が有り、月には死生が有る。

軍争篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、将が君より命を受け、軍を合わせ衆を聚め、和を交えて舎ま^{とど}るに、軍争より難しいものは莫い。軍争の難しさは、迂を直とし、患を利とすること。だからその途^{みち}を迂^まげ、そして利にてこれを誘う。人より後に発ち、人より先に至る。これぞ迂直の計を知る者である。軍争は利、軍争は危、軍を挙げて利を争えば及ばず、軍を委^おいて利を争えば輜重が捐^すてられる。このため、甲を巻いて趨^{はし}り、日夜^{とど}処まらず、倍の道を兼ねて行き、百里にして利を争えば、三将軍^{とりこ}を擒^{つよ}にされる。勁^{くつがえ}い者は先だち、疲れた者は後れ、その法は十に一が至る。五十里にして利を争えば、上將軍を蹶^{くつがえ}され、その法は半ばが至る。三十里にして利を争えば、三分の二が至る。

それで兵は詐にて立ち、利にて動き、分合にて変をなすものである。だからその疾^{はや}きことは風の如く、その徐^{しず}かなることは林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くことは雷震の如くして、嚮^むきを指すには衆を分け、地^{ひろ}を廓げるには利を分け、権を懸けてから動く。迂直の計を先に知る者は勝つ。これぞ軍争の法である。

軍政に曰う、言っても聞こえない、だから鼓金をつくる、視^{しめ}しても見えない、だから旌旗をつくる、と。このため昼の戦いには旌旗が多く、夜の戦いには金鼓が多い。さても金鼓・旌旗は人の耳目を一つにする所以である。人が既に専一であれば、勇む者も独りでは進むを得ず、怯む者も独りでは退くを得ない。紛紛紜紜、鬪乱して乱れもせず、渾渾沌沌、形円くして敗れもしない。これぞ用衆の法である。三軍には気を奪い、將軍には心を奪える。このため、朝の気は鋭、昼の気は惰、暮れの気は帰にして、善く兵を用いる者は、その鋭気を避け、その惰帰を撃つ。これぞ気を治める者である。治にて乱を待ち、静にて譁を待つ。これぞ心を治める者である。近にて遠を待ち、佚にて勞を待ち、飽にて飢を待つ。これぞ力を治める者である。正正の旗を邀えること無く、堂堂の陳を撃つこと勿し。これぞ変を治める者である。

九変編

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、高陵には向かうな、背丘には逆^{むか}えるな、絶地には留まるな、佯北には従うな、鋭卒は攻めるな、餌兵には食いつくな、帰師は還^{とど}めるな、圜師には必ず闕^かき、窮寇には迫るな。これぞ用兵の法である。

塗^{みち}には由らない所が有り、軍には撃たない所が有り、城には攻めない所が有り、地には争わない所が有り、君命にも受けない所が有る。

それで将であって九変の利に通じる者は、用兵の法を知っているものである。将であって九変の利に通じない者は、地形を知っていたとしても、地の利を得ることはできないものである。兵を治めても九変の術を知らない者は、五利を知っていたとしても、人の用を得ることはできないものである。

このために、智者の慮は必ず利害^{まし}を雑える。利を雑えるから務めは信^{まこと}になるのだ。害を雑えるから患いは解けるのだ。

これだから、諸侯を屈するには害により、諸侯を役するには業により、諸侯を趨らせるには利による。

それで用兵の法は、その来ないことを恃みとするので無く、吾^{こちら}の能くこれを待つこと有るを恃みとし、その攻めないことを恃みとするので無く、吾の攻めさせない所が有ることを恃みとするのだ。

そこで将には五危が有る。必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は侮られ、廉潔は辱められ、愛民は煩わされる。凡そこの五つは、将の過ちで、用兵の災いだ。軍を覆し将を殺すのは、必ず五危による。察しなくてはならないのである。

行軍篇

孫子は曰う。凡そ軍を^お処^みき敵を相ることについて。山を^こ絶えるには谷に依り、^{おか}生を視て高みに^い処^こき、戦いは降りてし登ることは無い。これぞ山に^い処^こるの軍である。

水を^こ絶えては必ず水から遠ざかり、客が水を^こ絶えてから来たれば、水の内にてこれを迎えるな。半ばまで^{わた}済らせてからこれを撃つのが利というもの。戦おうとするならば、水に附いて客を迎えるな。^{かみ}上に雨水あり、水流が至れば、渉るのを止め、その定まるときを待つ。^{おか}生を視て高みに^よ処^こり、水流を迎えない。これぞ水の上に^い処^こるの軍である。

斥沢を^{すみや}絶つには、ただ^{すみや}亟かに去り留まるな。もし斥沢の中にて軍を交えれば、必ず水草に依つて衆樹を背にする。これぞ斥沢に^い処^こるの軍である。

平陸は^{たいら}易に^よ処^こり、高みを右と背にし、^{くぼ}死を前に^よ生を後にする。これぞ平陸に^い処^こるの軍である。

凡そ四軍の利は、黄帝が四帝に勝った所以である。

凡そ軍は高みを好んで下を^{にく}悪む。陽を貴んで陰を賤しみ、^い生を養って^い実^いに^い処^こる。これを必勝と謂い、軍に百疾が無い。丘陵・堤防は、必ず陽に^い処^こてこれを右・背にする。これぞ兵の利、地の助けである。

凡そ地に絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙が有れば、必ず亟かにこれを去り、近づいてはいけない。^{こちら}吾はこれに遠ざかり、敵にはこれに近づかせ、吾はこれを迎え、敵にはこれを背にさせる。

軍の旁に険阻・潢井・葭葦・山林・藜藿が有るときは、必ず謹んでこれを覆索する。これぞ伏姦の^い処^こる所だ。

敵の近くして静かなる者は、その険を恃みとしているのだ。敵の遠くして戦いを挑み、人が進むのを欲する者は、その居る所が易にして利あるからだ。衆樹の動くのは来るのだ。衆草の^{おお}障^いが多いのは、疑わせるのだ。鳥が起つのは、^{おどろ}伏せているのだ。獣が^{かく}駭^{ひく}くのは、覆れているのだ。塵が高くして鋭いのは、車が来るのだ。卑くして広がるのは、徒が来るのだ。散って条達する

のは樵採しているのだ。少なくして往来するのは、營軍しているのだ。

辞ことばでは卑くして備えを益す者は、進むのだ。辞では彊つよくして進駆するかの者は、退くのだ。軽車が先ず出て側に居るものは、陳つらねるのだ。約が無くして和を請う者は、謀るのだ。奔走して兵を陳ねる者は、期するのだ。半ば進み半ば退く者は、誘うのだ。

杖して立つ者は、飢えるのだ。汲んで先ず飲む者は、渴くのだ。利を見ても進まない者は、勞つかれているのだ。鳥が集まる者は、虚しいのだ。夜の呼ぶ者は、恐れるのだ。軍の擾みだれる者は、将が重みないのだ。旌旗の動く者は、乱れるのだ。吏の怒る者は、倦んでいるのだ。馬を殺して肉食する者は、軍に糧かまが無いのだ。甗かまを懸け、その舎かたに返らない者は、窮寇くわうこなのだ。諄諄しんしん翁翁うんうんとして、徐おもむろに人かたと言ことる者は、衆しゅうを失しっているのだ。数々しばしば賞くわうする者は、窘くわうしんでいるのだ。数々罰する者は、困あっているのだ。先に暴あくして後でその衆しゅうを畏おそれる者は、不精ふせいの至りなのだ。来て委謝する者は、休息を欲しているのだ。兵が怒って迎むかいあい、久ひさくして合あわせず、また解とき去らないのは、必ず謹こんでこれを察さしろ。

兵は多いことを益とするのではないのだ。ただ武進すること無く、力を併あせ敵てきを料はかれば、それにて人を取るに足りるといふもの。さてもたはかだ慮あることが無なくて敵あを易やする者は、必ず人に擒とにされる。

卒が未だ親附しないのにこれを罰すれば服くわさず、服くわさなければ用もちい難いものだ。卒が已に親附しているのに罰が行われなければ用もちいることはできないのだ。だからこれを合あわせるには文ぶんにより、これをととの齊せいえるには武ぶによる。これぞ必取ひつとといふもの。令れいが素そより行われ、よってその民に教しゆえれば民は服する。令れいが素そより行われず、よってその民に教しゆえれば民は服さない。令れいが素そより信しんなる者は、衆しゅうと相あい得るのである。

地形篇

孫子は曰う。地形には、通るものが有り、^{さまたげ} 挂るものが有り、^{わか} 支れるものが有り、^{せま} 隘いものが有り、険しいものが有り、遠いものが有る。

^{こちら} 我はそこを往け、^{あちら} 彼もそこを来られるものを、通ると曰う。通る形には、先に高陽に居て、糧道を利して戦えば利あり。そこを往けても、そこを返るには難しいものを、^{さまたげ} 挂ると曰う。挂る形には、敵が備え無ければ出てこれに勝つ。敵がもし備え有れば勝たず、そこを返るは難しく不利。我は出て不利、彼も出て不利なるを、^{わか} 支れると曰う。支れる形には、敵が我を利するとしても、我からは出るな。引いてこれを去り、敵を半ばまで出させてこれを撃てば利あり。^{せま} 隘い形には、我は先にこれに居て、必ずこれを盈たして敵を待つ。もし敵が先にこれに居て、盈ちていれば^{すす} 従まず、盈ちていなければこれに従む。険しい形には、我は先にこれに居て、必ず高陽に居て敵を待つ。もし敵が先にこれに居れば、引いてこれを去り従むな。遠い形には、勢いが均しければそこで戦いを挑み難く、戦っては不利。凡そこの六つは、地の道であり、将の至任にして、察しなくてはならないのである。

そこで、兵には、走る者が有り、^{ゆる} 弛む者が有り、陥る者が有り、崩れる者が有り、乱れる者が有り、^に 北げる者が有る。凡そこの六つは、天の災いではなく、将の過ちである。

さても勢いが均しいときに、一を以て十を撃てば走る。卒が強く吏が弱ければ^{ゆる} 弛む。吏が強く卒が弱ければ陥る。大吏が怒って服さず、敵に^{うら} 遇えば懟んで自ら戦い、将がその能を知らなければ崩れる。将が弱く^{はか} 厳かでなく、教道が明らかでなく、吏卒は常が無く、兵を^{つら} 陳ねること^{でたらめ} 縦横なれば乱れる。将が敵を^{はか} 料ることができず、^{おほ} 少なくして衆いものに^{おほ} 合い、弱くして強いものを撃ち、兵には^に 選鋒が無ければ北げる。凡そこの六つは、敗けの道だ。将の至任にして、察しなくてはならないのである。

そも地形は兵の助けである。敵を料って勝を制し、険夷・遠近を計るのは、上将の道だ。これを知って戦い^{おこ} を用なう者は必ず勝ち、これを知らずして戦いを用なう者は必ず敗れる。だから戦道が必勝なれば、主は戦うなど曰っても、必ず戦ってよいのだ。戦道が不勝なれば、主は必ず戦

えと曰っても、戦わなくてよいのだ。そこで進んでも名を求めず、退いても罪を避けず、ただ民をこそ保ち、そして利が主に合うは、国の宝である。

卒を視ることみどりご 嬰兒の如くするから、これと深い谿へ赴くこともできる。卒を視ること愛子の如くするから、これと俱に死ぬこともできる。厚くしても使うことができず、愛しても令することができず、乱れても治めることができなければ、譬えるになまいきごと 驕子の若くなり、用いることはできないのだ。

吾が卒の撃てることを知っても、しかし敵の撃たせないことを知らなければ、勝の半ばである。敵を撃てることを知っても、しかし吾が卒の撃てないことを知らなければ、勝の半ばである。敵を撃てることを知り、吾が卒の撃てることを知っても、しかし地形のよって戦うべきでないことを知らなければ、勝の半ばである。それで兵を知る者は、動いて迷わず、挙げてつか 頼れない。だから曰う、彼を知り己を知れば、勝ちはあや 殆うくなくなる。地を知り天を知れば、勝ちは全うできるだろう。

九地篇

孫子は曰う。用兵の法には、散地が有り、軽地が有り、争地が有り、交地が有り、衢地が有り、重地が有り、圯地が有り、圉地が有り、死地が有る。

諸侯が自らその地に戦うところを、散地とする。人の地に入るもまだ深くないところを、軽地とする。我が得れば利、彼が得ても利あるところを、争地とする。我もそこを往け、彼もそこを来られるところを、交地とする。諸侯の地が四属し、先に至れば天下の衆を得るところを、衢地とする。人の地に入ること深くして、城邑を背にすること多いところを、重地とする。山林・險阻・沮沢を行き、凡そ道を行き難いところを、圯地とする。由って入る所は隘く、従って帰る所は迂り、彼は寡にして吾が衆を撃てるところを、圉地とする。疾戦すれば存ち、疾戦しなければ亡ぶところを、死地とする。

このため、散地では戦わず、軽地では止まらず、争地では攻めず、交地では絶たず、衢地では合交し、重地では掠め、圯地では行き、圉地では謀り、死地では戦う。

いわゆる古の善く兵を用いる者は、能く敵人を前後が及びあわず、衆寡が恃みあわず、貴賤が救いあわず、上下が扶けあわず、卒が離れて集まらず、兵が合っても齊わなくさせる。利に合ってこそ動き、利に合わなければ止どまる。

敢えて問う、敵が衆がり整っていま来ようとする。これをどう待つか。曰く、先にその愛する所を奪えば聴うであろう。兵の情は速さを主とする。人が及ばないのに乗じて、不虞の道に由り、その戒めない所を攻めるのだ。

凡そ客の道は、深く入れば専にして、主人は克たず、饒野を掠めて三軍は食うに足り、謹み養って勞れさせず、気を併せ力を積み、兵を運び謀を計り、測られなくする。これを往る所無しに投げいければ、死んでも北げない。死はどこに得ようが、士人は力を尽くす。

兵士は甚だしく陥れば懼れず、往く所が無ければ固まり、深く入れば拘がり、已むを得なければ闘う。このため、その兵は修めなくても戒み、求めなくても得、約さなくても親しみ、令しなくても信あり。祥いを禁じて疑いを去れば、死に至るまで之る所は無い。吾が士に余財は無く

ても、貨を悪むのではないのだ。余命は無くても、寿を悪むのではないのだ。

令が発せられる日には、士卒の坐る者は涕が襟を濡らし、偃臥する者は涕が頤に交わる。これを往る所無しに投げいければ、諸・嶽の勇になる。

それで善く兵を用いる者は、譬えば率然の如く、率然とは常山の蛇であるが、その首を撃てば尾が至り、その尾を撃てば首が至り、その中を撃てば首尾が俱に至る。敢えて問う、兵は率善の如くさせるべきか。曰く、そうだ。さても呉人は越人とは悪みあうものだが、その舟を同じくして濟り風に遭うときには、その助けあうことは、左右の手の如し。これだから馬を方べ輪を埋めても、まだ恃みとするには足りないのだ。勇を齊え一つにするのは、政の道である。剛柔みな得るのは、地の理である。それで善く兵を用いる者が、手を携えるが若く一つにならせるのは、人をして已むを得なくさせるのである。

將軍の事は、静かにして幽く、正しくして治まる。能く士卒の耳目を愚にし、これに知られない。その事を易え、その謀を革め、人に識られない。その居を易え、その途を迂げ、人に慮らせない。帥いてこれと期すれば、高くに登って梯を去るが如く、深く諸侯の地に入って機を發すれば、群羊を驅るが若し。驅られて往き、驅られて来るも、之く所を知らない。三軍の衆を聚め、これを險に投じる、これぞ將軍の事であり、九地の變、屈伸の利、人情の理は、察しなくてはならないのである。

それで、諸侯の謀を知らなければ、預め交わることはできず、山林・險阻・阻沢の形を知らなければ、行軍することはできず、郷導を用いなければ、地の利を得ることはできない。この三つは、一つも知らなければ、王霸の兵ではないのだ。

さても王霸の兵なるものは、大国を伐てばその衆は聚まることを得ず、威が敵に加わればその交わりは合うことを得ない。これだから、天下の交を争わず、天下の権を養わなくても、己の私を信ばし、威は敵に加わる。ためにその城を抜き、その国を墮とすことができる。

無法の賞を施し、無政の令を懸け、三軍の衆を犯いることは、一人を使うが若し。これを犯いるには事により、言にて告げるな。これを犯いるには利により、害にて告げるな。これを亡地に投げいれてこそ、その後存し、死地に陥れてこそ、その後生あり。そも衆は害に陥ってこそ、その後能く勝敗を為す。

だから兵を為すの事は、敵の意を順詳するに在る。并敵一向、千里に將を殺す、これぞ事を巧みにすると謂うもの。

このため、政を挙げる日には、関を夷し符を折り、その使いを通わせず、廊廟の上にて厲み、よってその事を誅める。敵人が開闔するとき、必ず亟かにこれに入り、その愛する所を微かに先にすると期し、踐墨随敵、よって戦い事を決する。このために始めは処女の如く、敵人が戸を開き、後には脱兎の如くし、敵を拒ぐに及ばせない。

用間篇

孫子は曰う。凡そ十万の師を興し、千里に兵を出せば、百姓の費・公家の奉は、日に千金を費やし、内外が騒動し、^{なりわい}事^とを操り得なくなる者は、七十万家。守りあうこと数年にして、一日に勝ちを争う。それを爵禄百金を愛しみ、敵の情を知ろうとしない者は、不仁の至りで、人の将ではなく、主の^{たす}佐けではなく、勝ちの主ではないのだ。だから明主賢将が、動いて人に勝ち、成功して衆に出る所以は、先知である。先知というものは、鬼神から取るものではなく、^{ほか}事^{かたど}に象^ることはできず、^{はかり}度^{あらわ}に験^{とも}そうとしてもいけない。必ず人によって取り、知るものなのだ。

そこで、間を用いることには五つが有る。郷間が有り、内間が有り、反間が有り、死間が有り、生間が有る。五つの間を^{とも}俱^なに起こし、その道は知られることが莫い、これぞ神紀と謂うもの、人君の宝である。

郷間は、その郷の人に因ってこれを用いる。内間は、その官人に因ってこれを用いる。反間は、その敵の間に因ってこれを用いる。死間は、誑事を外に為し、吾が間にこれを知らせて、敵に伝えさせる。生間は、^{かえ}反^{とも}り報^なじるのである。

それで、三軍の親しきは間より親しいものは莫く、賞は間より厚くするものは莫く、事は間より密かにするものは莫い。聖でなければ間を用いることはできず、仁でなければ間を使うことはできず、微妙でなければ間の実を得ることはできない。微なるかな微なるかな、間を用いない所は無いというもの。間の事がまだ発しないのに聞こえることあれば、間と告げた者とは皆、死なせる。

凡そ撃とうとする軍、攻めようとする城、殺そうとする^{あいて}人^{もと}は、必ず先にその守将・左右・謁者・門者・舎人の姓名を知り、吾が間に令して必ずこれを^{もと}索^め知らせる。

敵の間が来て^{こちら}我^{とど}を問する者は、因ってこれに利し、導いてこれを^{とど}舎^らませる。そうして反間は得て用いることができるのだ。これに因ってそれを知り、そうして郷間・内間は得て使うことができるのだ。これに因ってそれを知り、そうして死間は誑事を為し敵に告げることができる。これに因ってそれを知り、そうして生間は期した如くにさせることができる。五つの間の事は、

主が必ずそれを知る。それを知ることは必ず反間に在る。だから反間には厚くしなければいけないのである。

殷が興るとき、伊摯が夏に在り、周が興るとき、呂牙が殷に在った。だから明主賢将だけが、能く上智を間者にたて、必ず大功を為す。これが兵の要、三軍が恃みとして動く所である。

火攻篇

孫子は曰う。凡そ火攻には五つ有る。一に曰く火人、二に曰く火積、三に曰く火輜、四に曰く火庫、五に曰く火隊。火を行うには因が有り、因は必ず素より具える。火を発するには時が有り、火を起すには日が有る。時とは天が燥くときである。日とは月が箕・壁・翼・軫に在るときであり、凡そこの四宿は風が起こる日である。

火が内から発すれば、早く外からこれに応じる。火が発しその兵が静かならば、待つて攻めるな。その火の殃わざわいを極め、従むべきならこれに従み、従むべきでなければ止める。火を外から発するべきなら、内から待つことは無く、時を以てこれに発する。火を上風かざかみから発するときは、下風かざしもに攻めることは無い。昼の風が久しいときは、夜の風には止める。凡そ軍には五火の変が有ることを必ず知り、数すべにてこれを守る。

そして火にて攻めをたす佐けるものは明、水にて攻めを佐けるものは強。水によって絶つことはできるが、奪うことはできない。

さて戦い勝ち攻め取って、なおその功を修めなければ凶であり、命なづけて費留と曰う。だから明主はこれを慮り、良将はこれを修める。利でなければ動かず、得ることなければ用いず、危ういのでなければ戦わない。主は怒りにて師を興してはならず、将は愠うらみにて戦いを致してはならない。利に合えば動き、利に合わなければ止めろ。怒りは復た喜び、愠うらみは復た悦ほぐれることもあるが、亡びた国が復た存り、死んだ者が復た生きることはない。だから明主はこれを慎み、良将はこれを警いむ。これぞ国を安んじ軍を全たもつ道というものなのである。